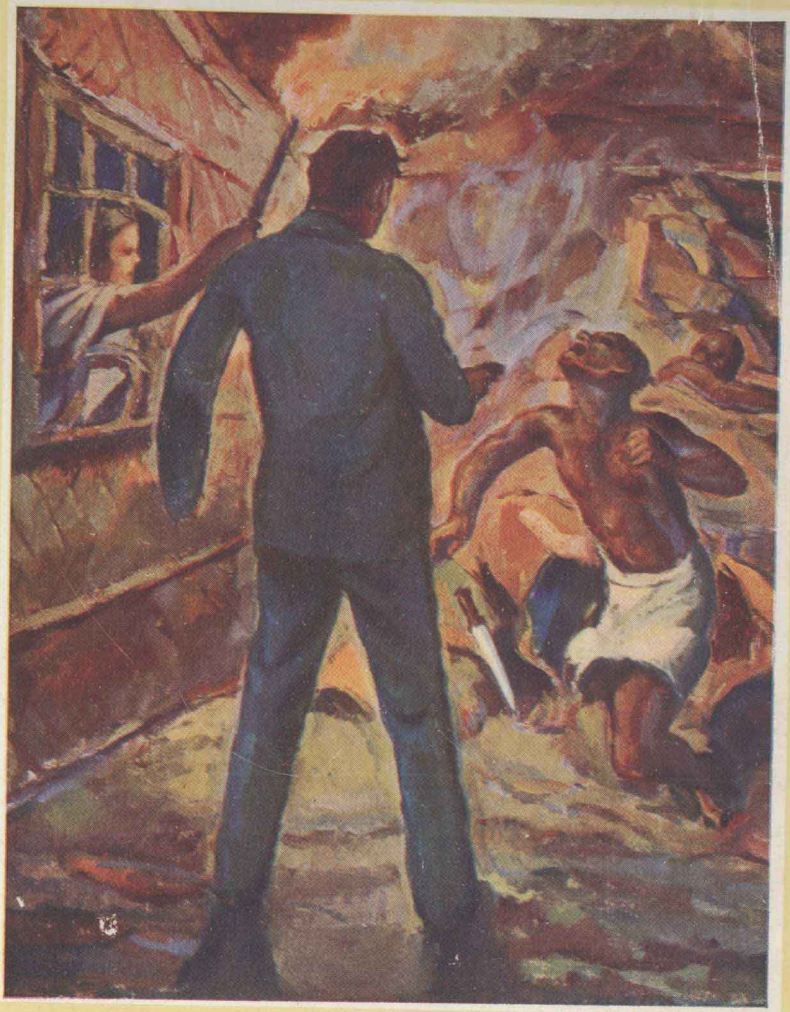

LORD JIM

Joseph Conrad

CROM YELLOW

Aldous Haxley

ドッランコ作　谷崎精二譯

ムジ・ドーロ

ハックレイス作　森田草平譯

ークロエイ・ムーロ

新潮社出版

第二期
世界文學全集(6)
ロオド・ジム
クローム・イエロー
第十三回配本

昭和六年九月廿五日印刷
昭和六年九月三十日發行

飜譯者　谷崎精二
　　森田草平
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込(代)八八八八〇九番　八八八〇〇六番　八八〇〇七八番　八八〇〇五番
振替東京　二三、四五〇番

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

解說

一、コンラッドの生涯

ジョゼフ・コンラッドは本名をテオドル・ジョゼフ・コンラッド・コルゼニオウスキイと云ひ、千八百五十七年十二月ポーランドのウクライナに生れた。父はポーランドの内亂に與した志士であつたゝめ、ロシア政府の命によつて故國を追はれ、コンラッドは幼にして國外に流浪する身となつたが、父は志士であると同時に又文藝に嗜み深かつたので、彼は少年時代から父の感化を受けて、デイケンズとかユウゴオとか云ふ文豪の作品に親しんだ。八歳の時母を失ひ、十二歳の時に父に連れられて故國へ歸つたが、その翌年には不幸にも父に死別れた。十七歳の時海員を志願して地中海通ひの船に乘り込み、廿一歳にして始めてイギリスの土を踏んで、英語を習ひ始め、海員試驗に及第して英國商船の船長となる資格を得、遂に英國に歸化した。

かうして彼は二十年の海員生活を送つたが、健康を害したので、海上生活を見捨てゝ英國の住民となり、著作に耽るやうになつた。處女作「オルメイアの痴行」を世に問うて、「マレイ諸島のキップリング」と云ふ名を博し、その後彼は續々と雄篇を發表した。彼の作品はポーランドの生活を背景にした物、海員生活を取材とした物、及び英國の田園生活を描いた物の三種に分つ事が出來るが、此の中第二種の海員生活を取材とした物に最も傑作が多く、やがて彼が海洋作家として名高い所因である。

「作家は彼の經驗によつて色づけられて想像の世界を造る。その世界は他人の世界と似通つてはゐるが、人は決して

同じ遠近法（パテスペクティヴ）を持たないが故に、讀者に執つてはいつも少し神祕的の物となる。そしてそれは結局事件と性格を通じての作家の個性の現れであらねばならぬ。」彼の此の言葉は、コンラッドの作家としての立場をよく説明してゐるやうに思はれる。彼は嚴正なリアリストではなく、ロマンティック・リアリストであつた。そしてその作風は大體に於て厭世的だつた。コンラッド夫人は「夫の性質は幸福ではなかつた。彼は屢々災厄が襲つて來るずつと前からそれを氣にしてゐた。」と語つてゐる。更に又コンラッド自身は「人間の歴史は一枚のシガレット・ペーパアに一句で書き盡せる。彼等は生れ、惱み、そして死んだ。それだけだが、而かもそれは長い物語である。」と云つてゐる。

彼は千九百二十四年に死んだ。

二、「ロード・ジム」について

「ロード・ジム」は千九百年に始めて世に出た作で、コンラッドの數多い作品の中で最高峰を占むる物である事は世評が一致してゐる。イギリスの牧師の家に生れたジムと云ふ男が海にあこがれて海員となり、善良な、忠實な、前途ある青年海員として自他共に許してゐたのに、或る時パトナ號と云ふ老朽船の高等船員として航海中、船が難破しかゝつたので、幾百の船客を置き去りにして他の船員と共にボートに乘つて逃げてしまふ。そのために彼は海員裁判に附せられたが、生來實直な男だつたゞけに彼の惱みは大きく、自己嫌惡と屈辱の念に苛まれ續け、一定の職に留まる氣がなくなつて放浪の旅を續ける。最後にマレイの或る村落に入り、其處で土人たちの尊敬と畏懼を一身に集め、土地の支配者のやうな地位を得たが、後に白人の暴漢の一隊が此の土地にやつて來て、ジムが此の村落のために盡した手段が却つて誤解を招き、彼は老酋長の許へ單身出かけて行つて從容として死に就く（一度船員時代に輕卒な行ひをして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

處罰され、汚名を雪ぐ機會を得なかつた彼は、二度と不名譽な振舞をしたくなかつたのだつた。そこに彼のロマンティクな性質の一端が現れてゐる。）――と云ふ筋である。

此の作品の特徴は、大部分話者の口を通じて述べられる物語である事である。先づ或る事件を説く。その中に現れて來る人物に就て又別の物語が始まり、その中に又他の挿話があると云つた風で、途中で話の筋は幾つにも分れ、結局それが主人公ジムの一身に歸納されて行くのである。元來かうした物語風の叙述は書き易いやうで、而かも藝術的効果を擧げるにはかなり困難な物であるが、さすがに巨匠コンラッドは一つの挿話、一つの事件の説明に、極めて鮮明な、印象的な筆觸を見せて、各情景に驚くべき程確乎たる客觀性を與へてゐる。場面とか背景とか云ふ外的の條件のくだ〳〵しい叙述をせずに、心理の精細な説明から直ちに人物、境遇を髣髴させる彼の巧みな手法は、いろ〳〵の意味で次ぎの時代の作家に影響を與へてゐる。英米の現代作家であるローレンスや、オニールや、ハアゲスハイマアは殊にコンラッドの作風の感化を受けた人として知られてゐる。

コンラッドのもう一つの特徴は、心理の説明に巧みな、適切な比喩を隨所に取入れてある事である。（さうした比喩的文章は一般の讀者のためには、なるべく説明の文句を加へて譯した方がわかり易いに違ひないが、文章が冗漫になるのを怖れて特に難解でない限り、私はそのまゝに譯して置いた。）元來コンラッドは生れながらのイギリス人でないために、その文章には彼特有の癖があつて、ところ〴〵フランス語の文脈などが取入れられてあり、一般に難解であるとされてゐる。勿論原文が難解だからと云つて、譯者がわざと讀み難く譯す必要はないが、さうかと云つて强ひて平俗な、惡達者な文章に直す必要もないと思ふ。此の點で譯者は相當の苦心を拂つたつもりである。尙コンラッド自身は「自分は英國の精神が内在的に自分の中に存してゐたのを感ずる。英語を知らなかつたなら、自分は何も書かな

かつたゞらう。」と云つてゐる。

だが「ロード・ジム」がコンラッドの文名を高からしめたのは、さうした彼特有の技巧や文體によるのではなく、寧ろ作品の主人公ジムの性格の、好ましき普遍性によるのだと云つてもいゝか知れない。それまでコンラッドの作品を讀んだのは、殆ど作家だけだつたが、「ロード・ジム」が現はれるに及んで、一般の讀者が始めて彼に注意し出したとさへ云はれてゐる。コンラッドはロシアの作家イワン・ツルゲネフの影響を受けたと傳へられてゐるが、彼にはツルゲネフだけの思想的深みがないやうである。たゞロマンスを再び現代の小說に取り入れたと云ふ點で、彼の功績は認められる。（谷崎精二）

三、ハックスレイの生涯

オールダス・ハックスレイ（Aldous Huxley）はヂェイムズ・ヂョイスと共に現代の英國文壇に君臨するのみならず、世界の文藝界に於てさへ輝かしい存在たらんとしてゐる。一八九四年の生れで日本流に數へて三十八歳、その若さでかくの如き地位を獲得したことは驚異に値する。彼はV・ウルフやD・ガーネットと共に、極めて惠まれた文學的環境と傳統に育つた。祖父は有名な科學者トマス・ハックスレイであり、母方に於ては詩人・批評家マスユウ・アーノルド及び小說家ハンフリ・ウォードと血緣になつてゐる。元來醫者になるべきところを、イートン在學中半ば盲目に陷つたため文學に方向轉換することになつた。彼はかくして科學的訓練を受けることのできなかつたことを後悔してゐるが、又一面醫者になつてゐたら今時分は過勞のため命を失つてゐたかも知れないと感謝をしてゐる。餘り身體の頑健でない彼は今日のヂャーナリスティックな仕事の重壓にすら堪へ兼ねてゐるのである。ハックスレイが戀愛の神祕をも冷靜に分析

し、宗教、道德等の假面を遠慮會釋なくひつぺがして行くのは、彼の科學尊重の精神から生れてゐるのである。二ケ年の半盲目狀態の後文字が判讀出來るやうになつたので、オックスフォードに入學して學位を得、卒業直後は偶々戰爭中だつたのでペンを執る代りに役所に働いたり教鞭を執つたりした。彼が文筆生活に一歩を踏み出したのは當時J・M・マリイの主宰してゐた「アスィニーアム」誌の編輯部に參加したことに於てである。その後あらゆる方面のヂャーナリスティックな仕事に健腕を振ひ、大いに筆の自信を得た。彼は或る題目に就て三十分間の豫備研究をすれば、讀者の何人よりもその題目に就て通曉することができると豪語してゐる。

ハックスレイの作品は大部分イタリイで書かれた。彼の作品の舞臺が屢々イタリイにとられ、その作品に南歐的な澄明な雰圍氣が感じられるのはそのためか。文壇仲間よりも太陽の光を愛する彼はロンドンやパリを訪づれることは稀である。讀書と旅行を無二の娯樂と考へてゐるらしい。創作も彼にとつては、一種の遊山である。長身痩軀である彼は歩く時心持前屈みに見える。或人はこれも長脚で有名な傳記作家リトン・ストレイチと比べて、ハックスレイの脚は正にその二倍もあらうと云ひ、如何にも印象的な筆致で、彼の立てる姿は、風に靡く柳のごとく都雅であると語つてゐる。

ハックスレイの文學的經歷は、多くの泰西作家に見られるやうに、やはり詩作を以て始められてゐる。彼は先づ「オックスフォド詩集」や「ウィールズ」などの詩歌選集、詩誌に若干の詩を寄せてから、處女詩集「ザ・バーニング・ウィール」を公にして文壇にデビュした。一九一六年のことである。次いで一九二〇年までの間に三册の詩集を發表して詩人として認められた。彼の散文に於ける活動は同年に上梓された短篇集「リンボウ」に始まる。續いて翌年「クローム・イエロー」によつて長篇小說に手を染め、爾後矢繼早やに短篇、長篇、エッセイ、旅行記等を發表して、大戰後の

英國文壇に、顯著な地歩を占めるに到つたのである。その作品は、別項に示すが如く、文學形式の殆んどあらゆるものに行きわたり、彼の廣汎な興味と旺盛な制作力とは、まだ三十代の作家としては、驚嘆せずにはゐられないものがある。

以下主に長篇、短篇に視野を限つて瞥見を試みる。

四、「クローム・イエロー」その他の作品

「クローム・イエロー」は一九二一年の作で、ハックスレイの最初の長篇である。クロームといふ英國のさる田舍の古い館に、ある夏集まつた詩人、畫家、學者、著述家といつた連中が館の主人の許で送る幾日かの生活を描く間に、クロームの館に絡はる幾多の挿話を點綴して、過去のグロテスクな物語や背景に、現實の若い男女の生活態度を解剖してゐるのがこの作である。主人公のデニスはこゝへ來て館の主人の姪であるアンに戀するが、その戀を積極的に進展させる決斷力には極めて乏しい。思想を行爲に移す機會を絶えず切望してゐながら、一旦その機會に直面すると、直ちに身を飜して自己の内部へとぐろを卷き、あげくの果てには自己嫌惡に襲はれ、自嘲の苦さに惱むと云つたやうな、いはゞハムレット型の人物である。作者はこれに配するにドン・ヂュアン型の人物イーヴァを以てしてゐる。彼は美貌と才智を兼ね備へた精力家で、情事を一種の仕事と見做すところから、行く先々で相手を見出しては直きに他へ移つて行く。クロームでもデニスを出し抜いて、アンを手に入れかけるが、それが失敗すると、わけもなくメァリイと關係を結ぶ。その翌日は又他の女を目指して館を立ち去らうといふのだ。この積極的外向的な心理がデニスの消極的内向的なそれと對照をなすと共に、吾々の内に並存する光を求むる心と闇を喜ぶ心とを、作者が擴大し誇張して、この二個の

人物を持出したものとも云はれよう。こゝに現代人に共通の惱みを戯畫化するハックスレイの透徹した理智を感得することができる。

尤も、現代に於けるハムレット型の人物といひ、ドン・ヂュアン型の人物といふも、二十世紀の初頭既にツルゲーネフのルーディン、アルチバーセフのサニンなぞを紹介された吾等には、さして目新しいものとは思はれない。しかもこれを英文學に逆輸入して、傳統を誇るイギリスの社會に勇敢に挑戰してゐる所に、彼の特異性がある。例へば、同じ戀愛にしても、在來は先づ戀人があつて、然る後戀愛が始まつた。然るにこの作の女性は、アンにしてもメァリィにしても、まだ相手の定まらない、それだけに一層遣瀬のない戀愛——所謂青春の抑壓に惱まされてゐる。これもアルチバーセフにあつては珍らしくない。しかも英文學にあつては一道の新味を傳へたものである。

なほ彼の長篇には所謂プロットが缺けてゐる。それはこの作でも大體窺はれるが、大作「ポイント・カウンタ・ポイント」に於ては殊に著しい。彼の小說は從來の劃一的なプロットを必要とする類のものではない。彼は劃一主義に生命の枯渴を認める作家である。クロームの館に集つた男女の數日間の生活を扱つて、そこに現實の多樣性を描かうとする。そのために、手法の上から云へば、心理分析がある、過去の挿話がはひる、議論が所嫌はず行はれる、場面の急激な轉換を用ひる、人物を媒介として端的な社會批評が行はれる。そして、作者は遙に自己を作品から隔離して置いて虛無的な雰圍氣の中に作全體を統制してゐる。

如上の諸點は他の作にも多かれ少なかれ反覆されるが、ハックスレイは一作毎に力點を巧妙に移動して作品の効果を擧ぐるに意を用ひてゐる。第二の長篇「道化踊(アンデイック・ヘイ)」は統制の點で隨一であると云はれる。ガムブリルといふ老建築技師と教職にあるその息子とが主要人物で、父親に無神論者で建築に理想を見出す稍エクセントリックな老年を描き、息子

に平凡な生活の束縛を脱して情事に新しい生命の泉を求める青年を取扱つてゐる。作者の建築に對する熱意、藝術家への諷刺、抑壓された欲望の剔抉など、「クローム・イエロー」より遙かに落着いた筆致が看取される。次の「ゾウズ・バレン・リーヴズ」は舞臺をイタリイに取つて、藝術を愛好するオールドウィンクル夫人の虚僞をあばく一方、彼女と交渉する數人の藝術家を描き分けてゐる。構成の上には新しい試みが見られる。數萬の讀者を獲得したといふ評判の「ポイント・カウンタァ・ポイント」は、六百餘頁の大部作で、作の成功不成功は別としても、なほ問題の作品たることを失はない。三つの家族を中心として、無數の人物を配置し、おびたゞしい議論の挿入と、場面の急激な轉換とに依つて、まぶしい程の効果を收めてゐる。これを要するに、作者は現代の種々相――自己意識過多の惱み、生活力の喪失、性の問題等を、さまゞゝな角度から、さまゞゝな形に於いて觀察して、そこに、音樂的な諧和を收めようといふのである。

短篇集は「リンボウ」以降、他に四册ある。こゝにも彼の鋭利な諷刺は色々の形式で現れてゐる。心理分析を用ひた好例として「ジョコンダの微笑」が擧げられる。肉を離れた靈的愛の存在を信ずる老孃が辛辣な諷刺の的になつてゐる。「リチャード・グリーノウ」は男女兩性を備へた男の心的葛藤を心理分析的に取扱つた特異な作品である。「クローム・イエロー」で示された話術の巧みさは、短篇に於ても衰へを見せない。話術ゆゑに讀ませ諷刺を忘れさせる作が、「若きアルキメデス」など二三に見られる。戯曲としては、今年發表した「光明の世界」が唯一のもの。デニス型の男と、イーヴァ型の男と近代女性に加ふるに神靈主義を信ずる典型的な舊時代の紳士を以てする、彼獨特の諷刺に充ちた喜劇である。

さて、かやうにハックスレイの關心は、單に純粹な文學のみに限らず、人間社會一般の諸現象にまで廣く傾けられて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ゐるが、この點こそ彼の特色でもあり、そのポピュラリティの存する所以でもある。彼はあらゆる事柄に興味を持ち、それ〴〵の方面で鋭い理智を働かせてスノブ的な常識の破壞を行ふ。その態度には何等建設的なところは認められないが、それは安易な統一は死への道であることを信ずるからである。かくの如くにして、彼の生活態度はたとひシニカルなものであるにもせよ、彼が正統な英文學の傳統を代表する今日の作家であるといふ意味に於て、ヴァインズ氏と共に、彼を「オーソドックス・モダン」と呼ぶには何等の躊躇を要しない。

五、ハックスレイ著作目錄

小　説

「クローム・イエロー」(Crome Yellow) 一九二一年
「道化踊」(Antic Hay) 一九二三年
「ゾゥズ・バレン・リーヴズ」(Those Barren Leaves) 一九二五年
「對位」(Point Counter Point) 一九二八年
〔註〕"This Way to Paradise" としてC・ディクスンに依り脚色され、一九三〇年ロンドンで上演。

短篇小説集

「リンボウ」(Limbo) 一九二〇年
「モータル・コイルズ」(Mortal Coils) 一九二二年

「小メキシコ帽」(Little Mexican)

〔註〕 アメリカ版は「若きアルキメデス」(Young Archimedes) 一九二四年

「トウ・オア・スリー・グレイスィズ」(Two or Three Graces) 一九二六年

「ブリーフ・キャンドルズ」(Brief Candles) 一九三〇年

エッセイ

「オン・ザ・マーヂン」(On the Margin : Notes and Essay.) 一九二三年

「エッセイズ・ニュー・アンド・オゥルド」(Essays New and Old.) 一九二六年

「プロパア・スタディズ」(Proper Studies) 一九二七年

「ホウリイ・フェイス其他」(Holy Face and Other Essays) (限定版) 一九二九年

「ドゥ・ウァット・ユー・ウィル」(Do What you Will) 一九二九年

「文學に於ける通俗性」(Vulgarity in Literature) 一九三〇年

「夜の音樂」(Music at Night) 一九三一年

旅行記

「アロング・ザ・ロッド」(Along the Road) 一九二五年

「ヂェスティング・パイレイト」(Jesting Pilate) 一九二六年

戯曲

「光明の世界」(The World of Light) 一九三一年

詩

「バーニング・ウィール」(The Burning Wheel) 一九一六年

「青春の敗北」(The Defeat of Youth) 一九一八年

「リーダ」(Leda) 一九二〇年

「蟬」(The Cicadas) 一九三一年　　(森田草平)

目次

ロード・ジム……コンラッド著 谷崎精二譯……一
クロームム・イエロー……ハックスレイ著 森田草平譯……三七

カヴーの繪……本文二二八頁の情景

ロード・ジム

コンラッド作
谷崎精二譯

一

彼は六呎に一二吋足りない、がつちりした體格をしてゐた。そして肩を屈め加減にして頭を突出し、突つかゝつて來る牡牛を思はせる上眼使ひで、眞直ぐに人に向つて進んだ。彼の聲は太くつて高く、態度は何等攻擊的の物を含まないが、一種頑固な自己主張を示してゐた。それは必然の結果らしかつた。そしてそれは見たところ他人に向けると同じく、彼自身にも向けられてゐた。彼は少しも汚れの無い綺麗さで、靴から帽子迄純白に裝つてゐた。そして彼が船具商の客引として生計を營んだ東洋の方々の港で、ひどく人氣があつた。

客引は何の試驗にも及第する必要は無いが、抽象的な能力を持つてゐて、それを實際に立證しなければならなかつた。その仕事と云ふのは帆や、蒸汽機關や、或ひは罐を用ひて、他の客引と競爭で投錨しようとする船に漕ぎ寄り、その船長に快活に挨拶して、名刺——船具商の業務用名刺を押しつけ、船長が初めて上陸する時には拔かりなく、と云つて見せびらかす風もなく、船内で飲食する品が一杯になつた廣大な、洞窟のやうな店へ案内する事だつた。其處では錨索に用ひる鏈鉤から、船尾の彫刻に要する金箔置きの書物迄、凡そ船を艤裝したり、化粧したりするに要する物は、何でも買ふ事が出來た。そして其處では船長は今迄會つた事も無かつた船具商に、さながら兄弟のやうに款待される。涼しい談話室、安樂椅子、酒、葉卷、書き物道具、港務規則の寫し、それから又船員の胸から三ヶ月の航海の鹽を溶かす歡迎の暖かさがある。かうして始まつた關係は船が港にゐる間、客引の日參によつて續けられる。船長に對して、彼はヨブの忍耐と、女の無我の獻身と、飲み仲間の陽氣さとを以て、さながら友人の如く誠實に、又實子の如くに氣を配る。そして後になつて勘定書を送るのだ。それは美しくも人情味のある仕事であつた。それ故に

良い客引は少ない。抽象的な能力を有する客引が、おまけに海員として育つた長所を併せて持つてゐれば、雇主は彼にどつさり金をくれ、そしていくらか甘やかすだけの値打を認める。ジムはいつも良い賃金を貰ひ、悪魔でも忠義を盡すだらう程に甘やかされた。それにも拘らず彼はよくよくの恩知らずで、突然仕事をやめて去るのが常であつた。雇主に執つては彼の述べる理由は云ふ迄も無く不十分な物であつた。彼が背を向けるや否や、雇主は「とてつも無い馬鹿奴が――」と云つた。これがジムの鋭敏な感受性に對する彼等の批評だつた。

海運業に從事する白人や船長には、彼は唯のジムであつた。それだけであつた。彼は他の名を持つてゐた。だが彼はそれを呼ばれないやうに念じてゐた。彼の匿名は籤のやうに穴だらけだつたが、それは一つの個性を匿すつもりの物ではなくつて、一つの事實を匿すつもりだつた。その事實が匿名を破つて現れた時、彼は偶まゐた港を去つて他の港へ――大概更に遠く東へと行くのを常とした。彼は常に港から離れなかつた。と云ふのは彼は海から追放された海員であり、客引以外の仕事には何の役にも立たない抽象的な能力を持つてゐたからであつた。そしてその事實は偶然に、而も必然に、彼に附いて來た。かうして彼は數年の中に次々にボンベイ、カルカッタ、ラングーン、ペナン、バタビヤで人に知られた。そして是等の滯留地の何處に於ても、彼は唯客引のジムであつた。後になつて我慢のならない物に對する彼の鋭い知覺に驅り立てられ、永久に港と白人から逃れて、遂に原始林へはいり込んだ時、彼がその悲しむべき才能を隱すべく選んだ叢林の村落のマレイ人は、彼の一綴りの匿名の上に、更に一語を加へた。彼等は彼をチュアン・ジムと呼んだ――ジム公とでも云ふ意味だつた。

もと彼は牧師の出だつた。立派な商船の多くの船長はこの敬虔と平和との住居から出てゐるのだつた。ジムの父は全能の神が大邸宅に住む事を得しめた人々の心の平靜を亂す事なしに、茅屋に住む人々の正義の爲めにと造られた不可知な物に就いての確かな知識を持つてゐた。丘の上の小さい教會は木の葉の疎らな圃立を透して見える、苔蒸した灰色の岩のやうな色を帶びてゐた。それは幾世紀も其處に立つてゐた。だが周りの樹々はおそらくその礎石を据ゑたのを覺えてゐたであらう。下手の牧師館の赤い正面は芝生と花壇と縱の木立の眞中で暖い色に光り、後に果樹園、右

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com